

---

# つみき談話

白亜迦舞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

つみき談話

### 【Nコード】

N2831D

### 【作者名】

白亜迦舞

### 【あらすじ】

世界は寄せ集められ、積み上げられた「つみき」。生きているつみきがあり、死んでいるつみきがある。形のないつみきがあり、限られたものにだけ見えるつみきがある。そんな世界の欠片に気が付くのは、ちょっとした暗がりでふらふらしている人間達。これはそんな彼らの眩きの「つみき」。

## 6：楓・晦

6

ぽちゃん

鉱石のような、硬質の、小鳥の姿が鮮明に映る鏡のような水面。そこに起こる円形波。

とぼん

水切り面で上下に浮き沈みする半球型のつみき。何度も、幾度も、戯れる子ども。そして水底に至る。

孔雀石のような梅の実が転がる僕の庭。まんまるの池に僕はつみきする。

2

これは、世界という大きなつみきの欠片。

そう言う物はいっぱい道ばたにもあるけれど、この手に取るのは、この心と響いて、この目に見えた欠片のつみきだけ。

それを池の水面の上に積む。本当に、つみきはポクポクとはすぐに水に沈まない。いつも、しばしの間考えるように水面の上に留まり、それから、名残惜しそうに浮き沈みしながら落ちていく。

それを独りで観察する。それが僕の遊び。

ここは何処にもない場所、僕だけの場所

はじめ、この池の水は透き通っていた。形もなく積み重なったつみき達の、形を無くして溜まった土のくぼみ。ガラスのように、土の色だけ透かしていた。

やがて、この水は色を持った。ある時は群青、ある時は鬱金。春の雨の日に紫陽花色になったこともあって、雪の花が水面を揺らす日に真紅になっていたこともあった。

それから 濁りはじめた。

深みの知れない玉髓のような池。心惹かれるものがなかったわけではないけど、好きになれなかった。

水に沈んで見えなくなったものみたいに、そこには不意に行けなくなった。

あの場所が世界の中に沈んでしまったのか、僕が十歳を過ぎたように時の中に沈んでしまったのか、どちらかはわからないけれど。

あの頃は独りだったけど、いまは姉さんがいる。姉さんの「気持ち」の中に沈んでいるのなら、僕が悔やむことは何もない。

霧の中、錐揉みして、綺麗さっぱり、消えた、昨日かそれより前

## 6：楓・晦（後書き）

長編を書く気合いもなく、中途半端な熱情だけもてあました挙げ句に、行き归りの電車の中で書き始めたものです。

お気に障ったのなら申し訳ありません。

お気に召したのなら踊って差し上げます。

もう少し書こうと思うのでとりあえず連載という形にしました。期待しないで待ってみてください。

## 2：天柄・盾とジルコニア（前書き）

数字が若くなったことを気にしないで下さい。各物語は独立して  
いますので。

## 2：天柄・盾とジルコニア

2

盾お兄ちゃん、雲のつみきって知ってる？

朝が来て間のない、クリームブルーの空の下。森の香りをやわらかく薫らせる丸太の長椅子。朝霧にしっとりとした緑のカーペット、その下地は土色。

涼しい風の中に二人の少年と少女。

少女のくると円らな色素の薄い目が少年を見上げている。

白くて、ふわふわしていて、息で吹くと飛んでいくんだよ。

十歳と少しの少女から八つ年の離れた少年、大人と子どもの境にある少年の名前は天柄・盾という。

先程からしきりと話しかけ、しかし返答の得られていない少女の名はジルコニア。あさな字で、本名は何人として知らない。

ジルコニアの熱のこもった視線から逃げ、盾は丸太に両手をついて身体を指示する姿勢で青空を見る。

浮かぶ雲が積木になんのかよ。

長い時間をかけて、ようやく得られた返答にジルコニアは嘲笑うように顔を歪めた。

A

不意に響く440ヘルツの調律音が盾を彼女の方へ振り向かせた。  
なら、見せてあげるわ。世界を作る為の、無数にある内の、  
一つのつみきを。

少女の声はそのまま、口調だけが一变したジルコニアが輪琴  
豎琴のフレームに弦ではなく一枚の円盤がはめられた楽器　を奏  
でた。

旋律は、旋回し空と風に舞う。白くも黒くもなり、染みいるように、浸食するように青空に響く。

すっかりとした形はない。しかしそこにあって、自然に消えることがない。

一つの音がいつまでも消えることなく、ひっそりと重なり続ける。積み重ね続ける。

ハーモニーのつみき。

諧調の上につみきがあり、諧調が解ければ風の中に落ちていった。

知ってる？ 空の風は一つじゃないこと。空の高さに従って、幾重にも積み重ねられて、蒼穹というハーモニーを奏で続けていること。



## 2：天柄・盾とジルコニア（後書き）

本当にルビが出来るんですね。このシステムは素晴らしいです。

## 5：鏡花水月（前書き）

カテゴリ変えました。それにともないサブタイトルの付け方も変えました。書いた順番＋人物名です。

## 5：鏡花水月

冷たいつみき、温かいつみき。

脆いつみきに燃えているつみきまで。

すべてここにある、私の周りに円を成して、うずたかく。

さあ、何を作りましょう？

喜んでいるつみきに土くれのつみき、それに解けかけた雪のつみき。  
手招きするとさらさらと集まって、春の庭を造りました。

月光のつみき、星明かりのつみき、夜色のふかふかしたつみき。  
ベットの形に積みました。

栗鼠。

栗鼠が来ました。ベットに乗り、数える間もなく瞼を閉じました。  
栗鼠は丸くなって眠ります。枕元に、夢のつみきを置いてあげましよう。

つみき達は私の手足のように、私の考えるまま集まり、崩れて、何処かへ。

あつまり、あそんで、あきれて、あくびして。

退屈な一本の草もない荒野の中、忘却という永い時の前から続く暇潰し。大きな「施設」の中で、私は遊び続けます。独りきり、滅んだ世界に取り残されて生き続けています。

滅んだ世界の中で、自分だけの世界を作る。つみきで、つくって、つぶします。

見渡す限りのつみきの中、私はときどき自分というものを見失います。散逸する世界の欠片達の中に、自分というものが埋没していくのを感じる。

私は誰ですか？

疑問は積み重ねられる。言葉も集めて使うことで思いを語ることができる。

しかし、こんな無為を繰り返しても答えには届きません。まるでバベルの塔のように。

書物の形をした記憶のが層を成す図書館で、私はその物語を知りました。天に焦がれて、神の御前へ進むことを欲した遙か昔の人間達が建てた塔の物語。塔は天につく前に形を変えた言葉達によって崩されてしまった。

私の疑問もその通り、いえ、それすらにも及びません。向かう天を捕らえられない私の身が、懼れることなく蒼穹を仰ぎ続けたバビロンの市民と同じはずありませんから。

今、箱庭の水面に波を作ったのは塔の形につんだつみきでしゅうか？

水面につまれた月の影は手ですくうことができません。  
そんな風に、私は私というものを掴むことができません。

## 8：クラレット・シーク・クーフナーとアレッシユ（前書き）

魔法戦闘が書きたくなったので、少し強引に入れてみました。

## 8：クラレット・シーク・クーフナーとアレッシュ

「仄暗い闇を突き抜けて、我の下に在りしあたたかき光よ。許されざる偽りの命、汝らの正義を鋭き刃とかえ敵を斬れ！」

葡萄酒色の髪の少女が杖を振り上げ高らかに叫ぶ。彼女のいでたちは魔法使い。黒い生地<sup>生地</sup>に紅く金光りする糸で魔法文字が刺繍されている。彼女の言葉は、彼女の下に集った精霊達への指令となり、敵に対しては滅びの力となつて具象する。

今、彼女がいるのは屋敷の敷地内の隅に置かれた物置の中。彼女が戦っている敵は、長く放置された物置の中で蓄積された埃が魔獣化したもの。決まった形を持たない埃の魔獣はなかなか滅することがない。

物置の明かり取りの下に敵が、少女の言葉に従つて刃となつた光に散る。だが、その反対側、光の届かない片隅から新たな魔獣が這い出してくる。

この物置は彼女の家族であり魔法使いの一族である者達が、ここ五十年間ただただ何も考えずに魔法具を積み込んだ場だ。碌に封印もされていない魔法具は魔力を存分にまき散らし、それはすべて埃の栄養<sup>栄養</sup>となった。本来なら容易には退治できないような魔獣がいても不思議ではないのだから、少女は幸運だとも言える。

しかし、彼女にその幸運を喜ぶ心はないようだ。それどころか、今にもここを丸ごと吹き飛ばすほどに怒り狂っていた。

「安らかなる闇よ、眠る可愛き闇よ。物寂しい汝の心はこの者達の命で慰めるがいい」

鼠を模つた魔獣が闇に包まれ、捕らえられる。偽りの命が闇に返される。

これを折にしばしの沈黙。

「もう……これで終わりよね、お兄様？」

少女が振り向いた物置の扉、そこに背をあずけ凭りかかる男がい

た。

青年と呼ぶにふさわしい頑強な骨格にすらりとした二枚面。少し長めにした髪が、彼自身が己の容姿に自信を持っていることを公にしていた。

少女の言葉に反応し、物憂げに目線を上げる。彼は今まで彼女が奮闘する様を指一本動かさずに、他人事のように見ていたのだ。

だが、彼が口にするのは彼女への労いではない。

「相変わらず莫迦だな、クラレット。これしきで奴らが消えて無くなると思っっているのか？」

な、と憤る少女。だが、ハツと振り返った彼女の目にいつの間にか集結を果たし、人一人分の高さまで生長した埃の山のシルエツトがあつた。

「だから言っただ。ここはもうまとめぶつ壊すしかねえ、てな。無理なんだよ。何年放置されてたと思う？ 五十年だぞ。ウサギなら十代は世代交代ができる時間だ。諦めろ、俺は帰るぞ」

そう言うだけ言って、彼は扉をくぐって出て行った。取り残された彼女は。

「アレツシュお兄様のバカー！」  
「がいいん。」

杖が石の床に突き立てられる。衝撃に反応し、もう一端の宝玉を中心に空に光の魔法陣が展開される。方形の魔法陣は音楽演奏の為の楽譜のような役割をする。

強い魔力をのせられた少女の声が朗々と唄い出す。

「深淵より沸き出でし滅びの右手よ。死者を焼き弔う炎獄の左手よ。破壊の両手もろて。雄々しき腕かいな広げ、我が前に立ちふさがりし総てを汝の物とするがいい。我は汝を呼ぶ、塵も残さず焼き消せ！」

先祖から伝わる闇と炎の精霊を同時に呼ぶ術。滅びと魔力をその領分とする闇の精霊と、純粹たる破壊の象徴である炎の精霊。その二つを同時に使役することは、攻撃魔法としては究極のエネルギーを引き出すことになる。

原理は同じだが、呪文自体は彼女オリジナル。十六年の人生で練り上げた呪文には彼女の思い入れが集結した名前が付けられている。  
グリーン・バースト  
「『漆黒の火葬』！」

はじめに物置の周囲を闇が包み隠し、次の瞬間、漆黒に染められた爆炎が炸裂した。

碌に視界も利かない暗黒の中、数千度の炎が理不尽なまでの暴虐を尽くす。

こうして、不死の域まで積み上げられた偽りの生命も終焉を迎えることとなった。当初の予定では破壊されるはずのなかった物置ごと黒いクレーターとなって。



10：紫部・陽子と織深・奏治

カーン

カーン！

高く澄み渡り、叩き付けるように響く音は何？

カーン……

大鐘の音か？ 葬送か祝福か？

否、これは鐘の音にあらず。これは碎ける音。

硬く、焼き固められた寄せ集めが、一夜の夢のように碎ける音。

「おお、すげえ。見るよ、陽子」

サウナの中にいるような思いのする夏の暑い日、冷房の力を無視された白い保健室の中で若い保健員の男が何やら暑苦しく興奮していた。

「ほら、色がキラキラア、て。綺麗だぞー」

「織深さん……それじゃなんだかわからないよ、子どもじゃないんだから。それに暑苦しい」

「う、お前うちの妹みたいな言い方するなよ……」

織深・奏治を苦笑いさせるのは、陽子と呼ばれた短い茶色の髪の少女。とある学園の制服を身につけた高校生である。

軽く皮肉を飛ばした陽子であったが、まったくそれは冗談の範囲。なにに、と奏治が手に握る物を覗き込んだ。

それは七面の水晶。

「この間、緋湖さんがふらりと来た時に置いていったんだぜ」

回想する男の目はオリーブ色。輝く視線に陽子はちょっと困ったような微笑みを返した。

水晶は織深の手の中で七色に光る。太陽の光を七つの面に分光させ、一つ一つの面がそれぞれ赤・橙・黄・緑・青・藍・紫と鮮やかに色づいている。

「すご……」

顔料に染められたことによる色ではない。白という原光から抽出された生の色がそこにはある。

「だろ？ でも何が凄いつて、太陽つて奴が一瞬たりともさばらず全部の色をちゃんと混ぜた白い光をよこしてやがるってことだと思っんだ。何かの色が欠ける瞬間はない。だからこそ、この世界が鮮やかに呼吸しているんだ」

呼吸の荒くなる奏治。だがその時、なめらかな水晶が彼の手から逃れた。

二つの悲鳴が真夏の保健室に響く。

しかし、次の刹那

カーン。

床面に衝突した水晶はまるで天国で鳴らされる鐘の音のように響き渡り、保健室の「音」を征服した。

まっすぐに、高らかに、響く。

澄みきった水をすり抜ける光のように、心を叩く。

「すごいな……割れる時まで……」

呆然と呟く織深。

陽子はいまの衝撃に声も出ないと言った様子。

彼らはそのまま朱い西日が窓から差し込むまでそのままだったという。

10：紫部・陽子と織深・奏治（後書き）

擬音の表現において、じつは宮沢賢治を目標にしていたりします。

その他風景描写も「神曲」だったり、古い文学作品の技術を現代のファンタジーに使えないかなあ、とか普段から大それた、というか莫迦なことを考えております。

私はエンデが一番好きです。その事についてはいずれお話ししたいと思います。「これはまた別の物語。いつか別の時、別の場所で話すことにしよう」でしたっけ？

## 14：紅葉・千重と天柄・刀夜

青い青い月。

冴えわたり、苛み、嘔き、裂く。

黒曜石の夜空を刃のような青い月光が、裂く。

裂いて、咲く。久遠の花、嘆きの声、怨恨。

月だけが円に微笑み、夜空の下のすべての者達は戦慄した。あまりに青すぎる月に、身も、心も切り裂かれ、ひた隠しにしていた忌むべき闇を曝け出されて。

青い、痛み。導かれた、たたずむ二人。

クイーン・オダタデヒルズフェンサー  
魔王と魔剣士。

正体は、十六の少女と二十一の青年。名は紅葉・千重と天柄・刀夜。

青い満月が昇り、それを知り畏怖した者達がそれぞれのねぐらに隠れきった頃、二人は何処ともなく現れた。

南東にあつた月が一番高く昇るまで、彼らはただ黙したまま離れて立っていた。

ついに、刀夜が問う。何か破壊して良いものはないだろうか。

彼がそのまま独白する。いままでこの青い月光の下で過去の回想をしていたこと。幼い頃に住処を焼かれ、穏やかだった人生を蹂躪された頃の記憶を思い出していた。

刀夜は千重に身体を向けて話しかけていた。話しかけながら、少しずつその方へ歩み寄っていった。

彼女はそれを見ていなかった。彼女は青い満月だけを仰ぎ見て、一瞬たりとも目を反らさなかった。瞬きも少なく。

千重は刀夜に気付いていないのだろうか？

否、近寄り続ける刀夜が残り十歩という範囲に入ったところで、千重は唐突に答えた。

彼女は彼に禁じた、些末な痛みだけで、己が壊れていると口にする事を。

一陣の風！

魔王の白い髪がなびく。

青い月明かりに同色に染められていた白い髪であったが、風に瞬きた刀夜が一瞬の暗闇の後に見たのは真紅に輝く長い髪。

サアと彼女の動きと共に髪がマントのように翻る。刀夜より背の低い彼女だったが、彼は見下ろされるような威圧を感じた。

土台を崩されたつみきは歪み続ける。しかし、欠けたままでも、歪んだままでも、壊れてしまう必要はない。誰かを、何かを壊す必要もない。

在るように在れば、十分だ。

青い月光退けし、猩々緋の魔王。浮つき揺らめく心にそれ以上の興味を示すことなく家へと帰った。

14：紅葉・千重と天柄・刀夜（後書き）

しりとりもやってみました。それと会話を台詞として表現しないとか試してみました。

## 9：七那瀬・神恵と立浪・架夜

この体育館にいくつのライトがあるんだろう？

退屈な全校朝会。私は天上を見上げ、骨組みの張り巡らされた空にぶら下がる電気の星を数えた。

十二個。

十二個のライトが、それぞれ勝手に影を作っている。

斜め右前の彼の、左隣の彼女の。

あれ？ 私ってこのライトの配置の中心にいる？

十二の方向から影が集まっている。

影の真ん中。重なる影。げっそりと暗く、くろぐろとした穴。なんだかいまの私の気分そっくり。

「神恵ちゃん、どうしたの？ 全校朝会は終わったよ」

心配げな女の子の声。ハッと我に返ると周りにはもう誰もいない。

「具合悪いの？ ちよつと顔色が悪いよ、保健室行く？」

「ううん、何でもないよ 架夜」

私を気遣ってくれる水色と空色の虹彩異色の双眸。オッドアイズ

にこりと笑いかえして立ち上がった。

「今日はなんだか眠くって。ていうか、今日の話すごく退屈じやなかった？ もう、世界がぐるぐるし始めて」

「うーん、でも朝会がつまらないのはいつものことでしょ？ それに神恵ちゃん、普段は寝こけてても周りが動き始めたら自然に目が覚めるじゃない」

私より三歳年上の架夜は本当に心配しているみたいだ。

「本当に大丈夫。さ、行こ？ 授業はじまっちゃうよ」

疑わしげな、勘繰るまなざしの架夜はなかなか動こうとしないかった。でも、私が努めてニコニコしているとようやく足を動かした。

「あー、そういえば盾先生来なかったよね。いつもはあなたと一

緒にいくせに」

「盾はね、この間私とデートしたせいで仕事が溜まりまくっているの。だから朝会にも来てないよ。それに、盾が私と一緒にいるんじゃないかって、私が盾と一緒にいるんだよ」

「ああ、そうですか。御馳走様でございます」

今はこうして砕けた口調の架夜は、友達じゃない人に対しては同い年であろうと年下であろうと丁寧語を貫くという、チョイ悪（？）な女の子だ。

「む、何にやにやしているのよ。感じ良くないですわ」

「ふふ、気にしない気にしない」

そして体育館の入り口。敷居を踏む時に、何かが私の心を引っ張った。

振り返る背後。硬質の床の上には何も無い。

「どうしたの？」

「ううん、別に。ただ、何も無くなって思ってた」

「落とし物？」

「えっと……、私の物じゃないやつなら」

わけがわからないという架夜の表情。吹き出しそうになるのを抑えて私は廊下に歩み出た。

「十二段に積まれた影のつみきが落ちてたの」



9：七那瀬・神恵と立浪・架夜（後書き）

全校朝会って懐かしい響だあ、とか考えながら書いていました。  
最近、書くのが遅くなっているのは何故でしょう。

## 12：ツミとアカ

さくり、さくり、鋤を撃つ。

土を耕し、新たな命が根を下ろす苗床を作る。

土を耕すとおいがする。鉄のようなにおい。

土を耕す、それは大地の衣を一つ剥ぐ事。うわべの乾いた土の下には、黒々と光る生々しい水分を持った土。

まるで内臓のよう。

立ち上るにおいは、血。

僕らは土をえぐり、大地のはらわたをむき出しにし、その中に種を植える。種は、植物は、まさしく血と肉を吸い摂り育つ寄生虫だ。そして、僕らはその寄生虫を食べて、またはその寄生虫を食べた生き物を食べて、生きている。

なんだか気持ち悪くないだろうか。

生きることは醜い。生きることは醜い。

今の人々は、そんなことは考えてもいないのだろうな。

うがたれた大地に、平気で家を建て、ゴミを埋める者達は、それにしても

気分が悪いな。

「ツミ、いつまで同じところを耕しているの？」

夢想からさめると、目の前に一人の少女が立っていた。ア力、だ。それが彼女の名前。ちなみに、ツミ、というのは僕の名前だが。

いつもの変わらない彼女のツヤのない赫い髪。珊瑚色の瞳が探るように、検めるように、僕の目を覗き込んでいる。

「ア力、ずっとみてたの？」

「いいえ。あんたのことなんて、かまっちゃいないわよ」

居丈高な態度。けど僕は気にしない。それが彼女というものだ。

僕は彼女のそんなところが好きだ。それに、彼女の高慢な態度に疲れても、家に帰れば優しいササヤキさんや、元気なキズオトがいる。「何、考えているの？」僕の浮ついた気分を見抜いたように彼女が問う。人と目を合わせながらものを考えるのは良くないな。くわばらくわばら、羅刹の目。目線をそらして、ついでに話題を反らしてみよう。

「土のことについて考えてたんだ」

「なにそれ。一丁前に農夫気取り？」

言葉の端々がいちいち厳しい。ちよつと苦笑。

「ううん、それよりは哲学的に。植物って土の栄養を吸い取って育つでしょ？それが寄生虫みたいだなあ、て思っで。で、それを食べている僕らって」「馬鹿馬鹿しい」

一蹴された。鼻先であしらわれた。

「そんな事考えている間に仕事を進めなさいよね。……もう少しでお昼ご飯にするってササヤキが言っでたわよ」

照れたような表情、彼女の瞳の奥に炎を見た。

彼女が歩み去った方向、その彼方の山の斜面の一角はその周囲にくらべて緑の萌芽が遅い。その理由は冬の間にあの辺が焼かれたからだ。外敵に出会った炎術士であるア力が、手加減できずに森ごと敵を焼いてしまった。

しかし、遅いとはいえ少しずつ森は再生している。夏の盛りまで

には去年と同じ、瑕一つ無い緑玉の様な美しい山並みとなるだろう。癒して、慈しんで、意味のないものに。

積み直したつみき。きえていく瑕は、わすれられていくのだろうか？

世界は決して揺るがない土台を持っている。それが凄いと思う。

大地、土。寄生虫みたいな僕らが蝕んでも、簡単には死に絶えてしまわない。

でも、一つだけ僕らが忘れてはいけなことがある。

僕らが世界に許されて生きていると言うこと

## 12：ツミとアカ（後書き）

現実問題として蝕まれ続けた地球は再生不可能な状態にあるんじゃないかと思います。流石に地球というつみきは崩されすぎたんじやないかなあ、と思います。しかし、今回は重い話は抜きにしたかったなのでその事は触れずにおきました。

ところで、私は一時期詩人を目指していたこともあったのです。

今回の話は一年前ぐらいに書いた詩のテーマでした。

## 16：キズオト（前書き）

今回は劇風に書いてみました。量が増えて、記号を多用していたら手が痛くなりました。情けないです。

## 16：キズオト

石造りの部屋。冷たい空気が立ち籠めている。一人の女性が机の前にした椅子に納まっている。その机だけ蝋燭の明かりがあり、周りは暗い。ここは 支配者 である彼女の執務室。タイトなドレスに身を包んだ彼女は一言も発せず書類に目を通し、署名していく。蝋燭の明かりが揺れる。

そこに一人の幼い少女・キズオトが入ってくる。闇の向こうから、不意に現れる。

登場の瞬間、少しの間だけ怯えたように周りを見回すが、奥に座る 支配者 を目にとめると臆することなく彼女の方へ走り寄っていく。

キズオト：「ねえ、 支配者 さん。怪我が治る時にゴミが入ったままになっちゃったらくえぐり出さないと駄目なのかな」

支配者：「何故、そんなことを聞くんだ？ その前にどこから入ってきた？」

キ：「（二つめの質問は聞かなかったように振る舞う）えっとね、それはあたしが良く怪我をするからなんだけど」

支：「……知るか。そんなことは 医療者 にでも聞くが良い」  
キ：「そっか。じゃあね」

キズオト、去る。

（暗転）

穏やかで優しい森の中の小屋。こじんまりとした小屋の中は主である女性によって一部の無駄なく利用されている。

主、医療者は壁を埋め尽くす棚の一つから、薄いカルテと思われる書類の束を手取る。長身に芥子色の薄地のコートを纏っている。

扉が開く。強い風が吹き込み、医療者の手にしたカルテの束が吹き散らかる。啞然とする彼女の前に、椅子を蹴飛ばしてキズオトが駆け寄る。

キ：「ねえねえ 医療者 さん。聞きたいことがあるんだけど」

医：「（暫く口を開けたまま沈黙している。それから初めて、視線の下に立つキズオトに気付く）あの、どちらから……」

キ：「（医療者の様子に構わず質問をはじめ）あのね、体質で傷がすぐ治っても、血の量はすぐには回復しないって本当？」

医：「え……、そんな……。 （おろおろしながら本の棚に行こうとし、転ぶ）」

キ：「（怒ったように）もう……。 わからないんだったら誰に聞いたらいいか教えてよ」

医：「（立ち上がって答えようとし、棚に手をかけるとその棚の上から酒瓶が降る。立ち上がることを断念し、まず質問に答える）

……では、不死者 さんに聞いて下さい」

キ：「（短く）そ。じゃね」

再び扉が開き、またもや強い風が吹き込んで棚が激しく振動する。

医療者は戦慄するが、何事もなく扉は閉じ風は収まる。

医：「（床に這いつくばったまま）何だったのでしょうか……」

（暗転）



次の舞台もまた森の中。しかし先程の森と違い、ここは枯れた木が並ぶ赤茶けた森。照明も暗い。不穏な森の中、少し広まったところに若い女性と、それより若い少女。それぞれ隣り合う枯れ木の幹に身体をあずけ休んでいる。

女性は、赤い髪をまるでマリー・アントワネットの様な大袈裟な結わえ方をしているのが特徴的だ。不死者 とは彼女のことで。少女の方は顔がやせて骨張っており、質素な衣類を身につけていることにより身体の方も痩せているのがわかる。

ひゅう、と甲高い音を立てる冷たい風。少女が震え、それを見た女性が少女の横に座り抱き寄せる。

枯れ葉を踏む音。キズオトが現れる。

キ：「あれ、二人いる。不死者 さんはどちら？（道化て）」  
不：「（身を起こして）私のことよ」

キ：「じゃあ、不死者 さん。質問だけど、お部屋を片付けていて間違つてよく使うものを置くにしまっちゃったらやり直さないといけないのかな？」

不：「……さあ」

キ：「ねえねえわからないの？ だったら誰に聞いたらいいか教えてよ」

不：「何で私が……。 （少女が 不死者 の服の裾を引き注意を惹く）何？ 改革者<sup>ミナ</sup>？」

不死者 、しばらく少女の顔を見つめ、そしてキズオトに向き直る。

不：「 あんた、あちこちの私の同類ワルキューレにちよつかいかけているの？」

キ：「（あからさまにとぼけて）え？ そんなこと……」

不：「（立ち上がって）得体の知れない人間め。覚悟しなさい！」

キ：「（逃げ出しながら）うひゃー、逃げろー」

キズオト退場。舞台の中心で 不死者 立つ。

不：「（腰に手を当てながら）ち、逃げられたか……」

（暗転）

古い日本家屋。夕暮れの光が当たる縁側、一人の女性が微笑みながら座っている。

女性の服装は青の強い朝顔模様の着物。青く長い髪がゆったりと背中に這っている。

キズオト登場。（舞台袖から気負いなく現れる）ササヤキの前に立ち止まる。

キ：「ただいまー、ササヤキ」

サ：「お帰りなさい。今日は何処まで行っていたのですか？」

キ：「何か血なまぐさい世界」

サ：「そうですね。あんまり余所の物語の人に迷惑をかけてはいけませんよ。皆さん、自分たちのつみきを積むので一生懸命なのですから」

キ：「ちえーお説教か。（ササヤキの横に腰を下ろす）ねえ、しりとりしよ」

サ：「もう少しでご飯ですから、ちよつとだけですよ」

キ：「うん。じゃ、【つみき】」

サ：「【きんか】」

キ：「【かんき】」

サ：「【きゅーす】」

キ：「【すまき】」

（暗くなり始める）

サ：「【ぎんし】」

キ：「【しき】」

サ：「（少し考える）【きじ】」

キ：「【じき】」

サ：「【きのう】」

キ：「【うわき】」

サ：「【きゅつこうれっしや】」

キ：「【やしき】」

サ：「（長く考える）【きみどり】」

キ：「【りんき】」

サ：「……………」

（真つ暗。幕が閉じる）

## 16: キズオト（後書き）

冬休みが終わったらこの子達で小説を書こうかな、とか考えています。そうになった時のタイトルは『my moon』になると思います。

## 一段目：告知（前書き）

そろそろ終わりにしようかなと言ったことでここから連作になります。  
私の中では十七つ目のつみき談話です。

## 一段目：告知

かつかつ。足音が不機嫌に響く。

かつかつ。放課後の廊下の雑踏を貫くように響く。

苦渋の面の教師、周囲の生徒はそんな彼女を好奇に満ちた目で盗み見ている。

両手をだらりと身体の横に垂らしている。まるで敵陣の中を歩み進むかのような張りつめた構え。しばしの間彼女を観察しそれに気付いてしまった生徒は、鳥肌の立つような恐怖を感じてそそくさと目線を反らし彼女から遠ざかっていった。

そうしてだんだんと孤独になっていく女性教師、猛烈といえる速さで彼女のたどり着いた場所は理事長室だった。

「緋湖・シンメイス、高等教師まいりました」

凜、というよりは怒気の満ちた声が理事長室に響く。厚い絨毯の敷かれた室内にもかかわらず、その音響は硬く冷たいホールにこだまするかのような様相を呈している。

「ごきげんよう、シンメイス先生。お呼び立てして御免遊ばせ」  
しかしそれに答えたのは優しさと穏やかさに満ちあふれた声だった。

「お忙しい中ようこそおいでになりましたね。そちらの椅子にどうぞ」

声の主は、緑の黒髪、黒真珠の瞳、ふわりとしたドレスから覗く肌も夜闇のような黒という全身黒一色の女性。ドレスに緑色の糸で何やら紋様が（緋湖は目のモチーフだと思っている）が刺繍されているのが唯一彼女に添えられた色彩だった。名はミエイナレシカ・イヤ・シュヴァルツ。ここ夢囃子学園の理事長補佐だ。声も優雅なら、立ち姿も優美であった。

理事長はといえば窓の方を向いて、緋湖に対しては背を向けた格

好で椅子に座っている。寝ているな、と彼女はその背中と白髪の頭を睨みつつ、ミエイナレシカのすすめを断った。

「ふふ、相変わらず私に心を開いて下さらないんですね。（ここで彼女は緋湖の返事を待ったが、少しして諦めた）仕方ありません、あなたがそう言う態度なら、こちらも真面目に本題に入らねばなりませんね。緋湖様、あなたに学園周辺に出没するゴーレムの排除を依頼、いえ、命令しますわ」

「何故、私なのですか？」

惘然とした面持ちで緋湖が質問した。

「これがあなたが行った体罰に対するペナルティーだからです」

「体罰？ あれがですか？」

「二・五メートルの天井につくまで積木を積みせると言う罰は充分身罰だと私達が判断しました。アレツシュ・クーフナー先生もこれに賛同してくれましたわ」

「アレツシュが？」

彼女は胸の中で舌打ちした。それを聞いたかのようにミエイナレシカは言った。

「ちなみに、アレツシュ様はいまマリの付き添いで写生に行っております」

う、と息詰まる彼女。言葉を失った教師に理事長補佐はとどめを刺した。

「というわけで少なくとも今晚はあなた一人でお願いしますね。ゴーレムは学校周辺と、敷地内にも出るようなので頑張ってください。他の教職の方に手伝って貰ってはいけませんよ。まあ、ただ生徒達はあなたを慕って、あるいは自主的な自衛行動から手伝ってくれるかも知れませんが、強要してはいけませんよ。　　やったら、わかりますからね」

ふああ、と欠伸。怒りのあまり表情を無くした緋湖が退室した後の理事長室にのんきに響く。

「良かったのか？」

短い問いかけ。『一人で行かせて良かったのか？』と言うのがその全部だろう。理事長、ファイルデンス・シュヴァルツの癖だった。

「心配してしまうのですか？ 妬いてしまいますわ」

茶目っ気たつぷりにミエイナレシカが答える。

阿呆、とファイルデンス。

「心配は無用かと思えますわ。彼女は何と言っても『トワイスマーフメント二重行動』の使い手ですもの」

そうか、と眠そうに理事長が言った。

彼の半開きの眼がガラス越しに見ているのは、束になって校門を出て行く生徒達。大事を取って集団下校するのだろう。

「面白くなりそうか？」

「どなたが動くゴレム積木なんて作ろうと思ったのかは気になりますわね」

あくまでもシュヴァルツ理事長夫妻の会話は呑気さに終始していた。



## 二段目：過去視

瞼を刺激する光。

眠りの海を突き抜けて、私を目覚めさせる。

何故でしょう？

私の閨はいつも暗闇に閉ざされるようになっていたのに。ネガイが間違つて明かり取りを明けてしまったのでしょうか。

ネガイ。

彼女の名を呼ぶ。しかし答えがない。いつも私に尽くしてくれる彼女らしくありません。

仕方ないので私が自ら窓を閉めることにします。視力に障害がある故のぼんやりとした視界の中、転ばないように周囲の気配を探りながら明かりの方へ動きます。

あら？ 硝子窓。

そういえば慣れ親しんだ閨とは造りが違うような気がします。私の閨は二畳ほどの狭い場所のはずなのに、ここはとっても広い。

ああ、そういえば。

ようやく思い出しました。私は架夜さんから招待の手紙を貰い、ネガイに内緒でここ夢囃子学園に来たのでした。

そうで そうそう。

いっぱいの人々の気配で満ちた空気に気分が浮かれてしまい、一人でうろろろしていたら眠くなってきたこの部屋に来たんですね。ここは納屋のような空気がします。

それで、ここは何処ですか？

鉄の扉の向こうに人の気配は希薄。おそらく、差し込む太陽の光が赤みを帯びていることから今は夕刻。みなさん帰ってしまったのでしよう。

急に視界が鮮明になってくる。幻視　がはじまるんですね。

幻視　とは　先視　、未来視に近い能力です。申し遅れましたが私の名は、サキ。この名の由来は私自身知らないのですが、おそらく先視から来ているのでしよう。

幻視の舞台は石らしき私の知らない素材の床。斜陽がスポットライトのように照らした場所に幻が形を成して立ち上がる。

人型の、崩れ続けているのに形を失わない矛盾した性の影。

つみきでこしらえられた巨人。

指を、人差し指で彼を突いた。私に触れられた幻は壊れましたが、すぐさま元の形に立ち直る。

そういえば。

ツミさんがいなくなる前に言っていましたね。かつて私達と暮らしていた男性ですが。

「この世界はもう積み直せないかも知れない。人間がどんなに力を合わせても。人間が力を合わせることを覚えていればの話だけれどね」

不自由な目の代わりに鋭くなった耳に、今初めて世界の崩れる音が聞こえました。

ツミさんはずっとこれを聞いていたのでしょうか。

だとしたら、彼は今何をしようとしているのでしょうか。

彼は今どちらにいらっしゃるのでしょうか。

その前に。

私は今どこにいたのでしょいか。

彼のことを考えていたら身体が火照ってきてしまいました。

そう言うわけで、皆様私をしばらく一人にして下さいますね？  
では御機嫌よう。

## 二段目：過去視（後書き）

十九個目のつみきです。

最後にちよつと含みを持たせてしまったのは、この間言いました次回作「my moon」、彼女達の物語をどっという風に語ろうかと迷っている故なのです。

十五禁小説、私には少し浅はかでしょうか？

### 三段目：始動

「事件は以上の通りです。」

しかし誉れ高き夢囃子学園の我々生徒達が決して取り乱すことのないよう、生徒会長として皆さんに一つのスローガンを掲げたいと思います。皆さん、これを心に刻んで、いざというときも醜態をさらすことのないようにして下さい。

『一致団結。小さなサイコロでも積みめば天に届く』

では、皆さん御機嫌よう。先程言いました通り、今日からはしばらく部活の時間を短くし、寮でも自宅でもかえる時は集団行動を心掛けて下さい」

夕刻の集会が解散される。どうやら壇上の生徒会長は大半の生徒から熱い支持を受けているらしく、なかなか皆帰ろうとしない。だが、名残惜しそうな生徒達も生徒会員によって促され帰路についていった。

それを見届けた後、生徒会長日輪・葵は舞台袖から控え室に入る。控え室内ではこれまた熱い視線を送ってくる彼女の部下達が待っていたが、これに短く暇を告げ裏口から外へと出た。

物憂げな表情の葵。誰そ彼の光に彼女の薄い色の髪が銅色に染め上げられる。夜を予告する冷えた風にふわりと金細工のようにひらめく。

ふいに気配を感じて彼女は体育館の屋上を見上げた。

五メートル以上の高見にあるのは葵と同じ制服を身につけた少女の影。顔を見ようと目を凝らす葵の視界の中で、その影の少女は

飛び降りた。

「ねえ、葵。じゃなくて……日輪生徒会長先輩。あの」

「彼野さん、他人の名前に称号を付ける時は一つで良いですよ。それと、誰かの前にいきなり高いところから飛び降りるのはどうかと思いますわ」

彼野、と呼ばれた少女、下の名前は愁奈あきなという。愁奈は断固とした葵の口調に早くも閉口しているようだった。しかし、一呼吸したのち自らを励まして話を続けた。

「それでね」「『それでね』？」

「それですね、日輪先輩。……えーと、あのスローガンどうにかならなかったの、じゃなくて、ならなかったんですか？」

「千重様は良いと言ってくれましたわ。何か問題でも？」  
胸を張って答える葵に、あのねえ、とあきれ顔の愁奈。

「きつと、千重ちゃんはちゃんと聞いてなかったんだね」

「何故その様なことを言うのです」

これには言葉を失う愁奈。苦笑したまま彼女は固まってしまった。  
「それで、わざわざそんなことを言いに来たのですか？ 他にも用向きがあるのではありませんか？」

「あ、そうそう。緋湖さんが例のゴーレムの排除に出られたようですけど、私達も出勤するべきじゃないんですか？」

「彼野さん？」

嫌な空気を感じる愁奈。

「先生を呼ぶ時は、苗字に『先生』と付けるのが常識ですよ」

もはや生返事混じりに、はあい。

が、葵が未だに苦い顔でいるのを見て背筋を伸ばす。

「……『対怪異部隊』の出勤ですか。あなたと、粗雑で知られるコランド・クーフナー、盗撮魔 十草・蘇芳に忘れ屋の立浪・架夜問題児を寄せ集めたあの部隊をですか」

「夏梅ちゃんもいますけど……」

「彼女は学校にすら来てないでしょう」

沈黙。愁奈は針のむしろに座っている気分だった。

だが、冷や汗を流す愁奈の眼前で、ふ、と生徒会長は嬉しそうに

笑った。

「良いものではありませんか。とりあえず準備だけしなさい。今夜は私が出ますから」

「あ、でも理事長の許可は」

「すでに取ってあります」

微笑む葵の前に、してやられたのかな、と胸中で考える愁奈。でも、と彼女は一つの疑問に思い至った。

「どうして、さっき日輪先輩は元気がなかったのですか？」

葵の顔から笑みが消える。表情をなくした彼女は、太陽の隠れた地平線にその面を向ける。おもて

「今回の相手のことを思っていたのです。私が得た情報の通りなら、ターゲットは一筋縄ではいかないでしょう。……その事を私は憂いていたのです」

残光の中、彼女の告白は影のように薄く、しかしはっきりと世界に落とされた。

### 三段目：始動（後書き）

二十一個目です。

今回の登場人物、ひのわ・あおい、と、ひの・あきな、て音が似て  
ますね。



#### 四段目：夜戦

ああ……幸せだ。

それは厳しい冬の終わりに、雪の中から芽吹く植物を見た気分。

それは憂いに満ちた長い旅から故郷へと帰り着いた気分。

それは迷い込んだ嵐の山中で山小屋を見つけた気分。

そして、これは愛しい千重さんの着替えを隠し撮った写真を手に入れた気分！

ハハハッハハハッハハハッハ！

気分を抑えきれず、声をあげて笑ってしまう。

もうこれで今夜は眠れないだろう。この高鳴る欲望は、一晩かけて「愛」へと昇華されるのだ。

もう興奮でまっすぐ歩くことすら難しい。足がふらふらして、あ、また躓いた。

がこん。

何だ？ この夜に騒々しい奴め。自分のことは棚に上げて私は後ろを見た。

て、マジですか？

理科室を占拠して、生徒会の告知を無視して盗撮フィルムの現像をしながら、本当に出るのかな、て心配してたら、本当に出ました。ゴーレム。

噂によると、校内売店で一番値の張る自衛ツール「爆殺人参ダイナマイト」をくらつても倒せなかったという。一度壊れても、再生能力を持っているという。

ゴーレム。

がこん。

ゴーレム。

がこん！

くそ、何の。私だつてこう見えて陰陽師の名門十草家の生まれだ。こんな石だか何だかわからない物で構成された式神にやられるものか。

「急急如律令！ 土くれ、芥よりつくられし物、清廉なる水に流され、消える！」

懐にいつも入れている水妖「みずち」の封札を取り出し、投げつける。

あれ？ 今投げたの千重さんの生写真じゃないですか？

間違つた。その事実だけに頭が真っ白になった私は敵の拳動も忘れ身体を前に出す。当然、次の瞬間に眼前に迫ってきたのはゴーレムの重くて硬そうな鋼鉄の拳。

終わった……。

悔いはあつたがやむを得ない事情は飲み込んでしまうのが私だ。

目をつむって冥界への道が開けるのを待った。

しかし、それはなかった。

斬、と風と共に分厚い紙を切り裂くような音が聞こえた。

音が聞こえたと同時に目を開いた時には、私の身体は敵より十メートルは離れた場所に運ばれていた。女性の腕に抱えられて。

トワイスマーフメント  
『二重行動』。

「シンメイス先生ですか」

「お前、生徒会の告知を聞いていなかったのか」

さすがは『対怪異部隊』所属だな、とそれが物理の法則かのように彼女はひとりごちていた。

私の足が地面についたのを確認して、シンメイス教師は腕の中から私を解放する。私の背中には彼女の大きめの乳房の感覚が残された。

いかんいかん。私は千重さん一筋なのだ。

そんな事を目の前の状況を忘れて考えていたら、先程切り落とされたゴーレムの腕が砲弾のように飛んできた。

また、かわせませんね。

私は諦めた。だが、隣に立つシンメイス教師は諦めてはいなかった。その必要もなかった。

・立ちつくす私の身体を突き飛ばし、その反動で自分も攻撃射線の上から逃げる。

・敵の懷に潜り込み、斬る。

この二つの行動を彼女は同じ瞬間に起こした。これが二重行動だ。トワイスマーフメント  
ゴーレムは袈裟切りに大きく傷を付けられ、切断面から向こう側が見えた。

しかし、一秒後にはそれも消えた。

「再生か、面倒だな」

「先生、私もやります」

この申し出に答えたのは両手に剣を持ったシンメイス教師ではなかった。

「では、十草さんは私の司令下におかれるということで宜しいですね」

「その声は、葵さん」

背後を振り返ると、鶺鴒色の長い髪を後ろで束ね大型の薙刀を手にした女子高生が立っていた。我らが生徒会長、日輪・葵だ。

「私が、あなたの下僕に？」

「十草さん、口答えをするなら放課後に第四理科室を占拠して現像していた物について取り調べて差し上げても構わないのですよ」

「あ、わかりました」

こうして臨時のスリーフォーメーションが組まれる。

「私が強撃を与える。日輪は敵の攪乱を。十草はバックアップだ」

だが、私達の猛攻にもかかわらず、この夜にゴーレム殲滅を果たすことはできなかった。

#### 四段目：夜戦（後書き）

二十二個目です。

今日はなんだか忙しいです。明日から学校なのでゆっくりしたいのですけど。

## 五段目：転生

生まれ続けるハーモニー。

終わり続けるメロデー！。

消えて、現れて、死んで、はじまる。

生まれ変わり続ける。

カノン  
転生曲。

そこは学内でも屈指の狭さを誇る第三音楽室。朝の慎ましげな日光が差し込む中、古びた安物オルガンが、象の鳴き声のような音色で歌い続けていた。

壮麗なる合唱。

果てしなく厚く。

自らの溜息さえ聞こえないほど圧倒的。

演奏者はつややかな黒髪の少年。端正な顔かけられた眼鏡は彼の賢才をアピールさせられていた。

大袈裟な身振り。いったい彼は己の観客が何人いると思っているのか。そこには彼の妹しかいないのだ。彼は演奏者としては申し分ない能力を持っているが、一般人としてはふさわしくない自意識を持っているらしい。

がらり

「おい三都<sup>みやと</sup>、そろそろ授業だぜ。出ないのか？」

大柄な少年が音楽室の狭い戸口に身を屈めながら入ってきた。錆びた鉄のような赤みがかった黒髪が、寝癖のせいか嵐にもまれたようにばさばさだった。彼はコランド・クーフナー、高等部三年C組の学生だ。

一方、三都と呼ばれた少年、詩之崎・三都はカノンの演奏を止め

ようとはしなかった。

彼の指でつま弾かれるカノンは、彼と彼の妹を包み込む砦のように一切の音から彼らを遮断していた。幾度コランドが呼びかけても彼の声は三都の耳に届きすらない。

やがてコランドは諦めを知った。床に座り込み、彼の見事な演奏を鑑賞することにした。

しかし、コランドが背負った大きな鞆とベースギターを床におろした瞬間にハーモニーの砦は崩れ去った。破片と言うべき残響だけ、床に腰を下ろしたコランドは聞くことができた。

「おい、これからだろ？」

「何のことかな。君に聴かせる音楽は、あいにく僕は知らないんだが」

なに、と息巻いたコランドを三都は鼻で笑った。そして、「冗談だよ、と付け足した。

「コランド、聞きたいことがあるんだけど」

コランドは質問を許す。

「どうして、君はそんなに図々しいんだい？ テスト前に勉強聞くだけならいざ知らず、普段の日に僕と七音のプライベートに関わってくるのはどういう見があつてのことなのかな？」

辛口な友人に思わず弱気に感じて、コランドは彼の妹、七音ななに視線を送った。

「お兄様、お友達はたとえ屑だとしてもぞんざいに扱って良いものではありませんよ」

「おい、けなすか助けるかどっちかにしてくれ」

七音はそんな彼の言葉に返答をすることはなかった。それより、と彼女は兄に呼びかける。彼のカノンを聞きながらずっと読んでいた本を膝の上で閉じて。

「手がかりを見付けることができましたわ」

「へえ、さすがは僕の可愛い『物語使い』」

につこりと幼い七音が笑う。その微笑みに天使の面影を覚え、コ

ランドは先程までの虐待を忘れてにやけてしまった。

「これは『ツミ』の物語ですわ」

「罪？」コランドが聞いた。

「さあ……、私には『ツミ』の音が示す意味はわかりません」

小首をかしげる彼女の仕草も可愛らしかった。コランドが三都を見ると、彼はまるで自分の育てた猫を見るような御満悦の笑顔だった。

「それ以上、その物語に触れないのかい？」

兄の問いかけに七音はすまなそうに首を垂れる。

「ごめんなさい。もう少し待って頂けますか？」

「構わないよ、ゆっくりしなさい。君を信じているよ」

がう、三都が座っていたオルガンの椅子が鍵盤の下に収納される。

「さあ、行こうか。授業に遅れるよ、コランド」

この後、詩之崎兄弟はそれぞれ授業を抜け出していた。コランドはこれに気付けなかった。



## 六段目：会議

「これより拡大教員会議を始める」

白髪の理事長フアイルードンスが面倒そうに告げる。

「議題は一つ。昨夜も現れたゴーレムのことだ。まずシンメイス、昨夜の戦闘の報告をしろ」

がたり、と音を立てて緋湖・シンメイスが立ち上がる。徹夜で報告書を書かされた彼女の目はいつにもまして座っていた。

「昨夜の21：30頃、第三校門から東に徒歩五分の地点で件のゴーレムによる襲撃がありました。襲撃された生徒は、中等部三年B組の十草・蘇芳。彼は生徒会 対怪異部隊 の一員ではあります。が、彼がその場にいたのは任務とは関係のないことです。

「直後に私が介入しました。しばらくの後、生徒会長、日輪・葵が武装状態で参戦。結果的に三人でゴーレムとの戦闘に当たりましたが、敵性体の持っていた強い再生能力のため撃破することはできませんでした。

「ゴーレムの素材は様々な物でした。多くは廃鉄鉱でしたが、瞳は炎、背中には固まった血液など、ところどころに不可思議な混ぜ物がありました。戦闘を放棄した後私もゴーレムの行動を観察していましたが、五時間ほど夜の街を徘徊した後、月が沈むと同じくして姿を消しました」

フアイルードンスが緋湖に座るように勧める。長く話したせいか、彼女は力尽きたように椅子を軋ませて腰を下ろした。

質問を、と理事長が議事を進行させる。挙手したのは初等教師の藤磐・希来だった。

「ゴーレムは月魔力をパワーソースとするアンチデットだったと言ったことですか？」

眉を顰めて、目を閉じながら緋湖が答える。

「それはどうでしょう。私には、ゴーレムの創造者が月の出の間

だけゴーレムが活動するように設定していたように思えます」

「創造者の姿は側になかったのですか？」

「ありません。もしあったのなら、真っ先にその身柄を確保しています」

「探さなかったのですか？ 物があるのだから、作り手を探知するのは容易なことでしょう」

「彼女はあんたみたいな魔術馬鹿じゃないでしょ」

発言したのは初等教師チャロアイトだ。教師らしからぬ、なまめかしい容姿が特徴的だ。

「探知の魔術は簡単な術で、手段さえ知っていれば誰にでも……」

「あんたにとってはでしょ。だったら、あんたの生徒はみんな使えるのかい」

「生徒と教師は違う。第一彼女は最初から索敵の任についていたのだからそれくらいの準備……」

「武術と特殊体術に偏った彼女がそんなこと思いつくわけ無いでしょ」

「おい……」

ぱんぱんと誰かが手を叩いた。理事長だった。

「お前達、何か打開案とかはないのか」

会議室から音が消えた。

「じゃあ、とりあえず俺が決めたこと。召喚士 失乃・巴臨時

教員と、三瓶・瀬里、それとジルコニアに動いて貰うことにした。

それでいいだろう？」

あくまでも熱意のこもらない彼の声。教員たちがそれぞれ適当に首を振ろうとする。

その時、学園が揺れた。

「地震？」

「おい、何だあの空！」

窓から空を見た男性教師が叫んだ。

地震と同時に、学園の空が緑色になっていた。太陽はまるで瑪瑙

のような重々しい輝きはなっている。

「敵が来たようですね」

水晶石に学園各所の映像を映し出した魔法使いである希夾が言った。

「お前たち、あんまり暴れるなよ。教師としての立場を守れ」

何処からか、金剛石の穂先を持つ短槍を取り出した理事長が言った。

「暴れるのはガキどもだけで良い。大人は、敵を倒すだけにしろ」  
苦い顔、心得顔、教師たちの顔はそれぞれだ。だが、みな彼の言葉を守ろうと決意する。

この学園を守るのは、この学園にいる者達すべての力だ。学園にいる者達の思いが砦を積み上げる。様々な気性の者達がここにはいるが、守る、その思いだけはすべての者達の心に通じているのだ。

「行くぞ」

理事長の宣告と共に、学園は戦場となる。

## 六段目：会議（後書き）

二十三個目です。

あと三話でまとめようと思います。私は、どうもくだらないことをだらだらと思いつきそれを書いてしまいます。一段目を書いた時は、五段ぐらいで終わると思ったんですけど。

読んで下さる方、せっかくだから最後までお付き合い下さい。

## 七段目：絶望

この夢囃子学園は寄せ集めである。

数々の物語から招かれた者達が、平和という制服を着てかりそめの生活を営んでいる。

招かれた者達は戦士だった、その多くが。

だから、学園はたやすく戦場となった。

しかし、それでもここは夢囃子学園だった。その事に、揺らぎはなかった。

寄せ集めの平和、寄せ集めの絆。積み上げた日々の生活は儚いのみき遊びにすぎない。だが、それでも彼らはそれを守る。彼らが学園を守る為に戦っているのだから、ここは戦場となった今でも学園であり続けるのだ。

ここは、彼らの不可侵の遊技場なのだ。彼ら自身にも侵すことできない。

学園の中、数ある中でも屈指の特異性を持つ第七水泳場。ここは「忘却」の溜まり場、プールにレテ河の水が張られている。いま、緑色の空に覆われた学園ですべてが緑色に見える。第七水泳場でもその例外ではない。

緑青ろくしょうの月の下、プールの縁に二つの人影があった。

一つは天使モノ。<sup>あまつか</sup>『孤独』に取り憑かれ、学園にいて制服を身にしていても、誰とも言葉を交わすことも触れあうこともできない、鏡花水月 に呪われた少女。

一つはサキ。サキは緋袴を穿いて巫女のような格好をしている。サキは学園の外に住んでいる。友人により招待されたものの、騒動の中で忘れ去られた人間。サキを知る人間もまた少ない。そして、いま誰の意識にもない彼女だからこそ、モノが接触できるのだ。

そして二人は手を取り合い、忘却 が形なす場所、第七水泳場 に来た。

二人が水面を覗き込む中、プールは泡立ちはじめた。

「ツミさん」

サキの、少女のようにか細い声が呼ぶのは、かつて彼女と共にあった少年の名。

しかし、水面から飛び出たのは黒い魚のような影だった。

モノの手刀が閃く。

「出てきなさい。戯れの時は終わりました。直ちに、逃げることなく！」

サキの声より少し高いモノの声が、水面と、忘却に侵された静寂を、打つ。

世界の色が変わる。

青く。

緑から、青へ。

毒から、悲しみへ。

青い水泳場は、月下にあるようだった。

そして、牡丹の紋様の着物を身につけた少年が姿を現した。

「完全なつみきとは何だと思う？」

「ツミさん、もうこんなことは止めてください。もういちど、あの頃と同じような生活を、同じような物語をはじめましょう?」  
サキが懇願する。ツミは、その誘いに首を振って答える、悲しげに。

「ごめん、サキ。それはできないよ。僕は、ツミは、『罪』になつてしまったから。人の罪を知ってしまったから」

ツミはモノに目をやった。それに立つ少女は、先程の覇気ある様子とはうってかわった、意志のない虚ろな人形のように突っ立っていた。

「君はモノと言っただけ。聞いてくれるかな。僕はね、ある時この世界で繰り返されているつみき遊びが、本当に酷く、怖い物だと知ってしまったんだ。」

「人が生きることとはつみきを積むことなんだ。食べたものがこの身を造り、知ったことがこの心を作る。屍や、思い出や、そんな物を積み続けて僕らは生きている。でも、そんなつみきは壊れてしまう時がある。だけど、そこでつみきを止めたら僕らは死ぬしかないんだ。」

「そして、つみきは、自分じゃない他の存在から、取らないといけないんだ。僕らは掠奪しないと生きていけないんだ。このつみきは永遠に完成しないというのに。」

「しかも、僕らを載せている世界は壊れようとしている。」

「世界は止めてくれと言っている。つみきをする、生きる者達も、止めたいと言っている。だから、僕は止めさせることにした」

そして、彼はモノに是非を問う。

「私には、答えられません。あなたの言うとおり、世界は確かに悲しいものだと思いますけど、私はこの世界が滅びることを肯定できないから」

しかし、モノはこの世界の継続を肯定することもまたできな

い。

青に満たされたこの空間は、哀しみで飽和しているようだった。  
どこまでも不完全な世界に絶望したツミ、滅びへの問いに是非も言  
うことができないモノ、そして

「君は相変わらず、先視<sup>みた</sup>した未来に抗って希望を見出そうとして  
いるんだね、サキ」

終焉を迎える未来をみてもなお、希望を捨てようとしなないサキ。



## 七段目：絶望（後書き）

二十七段目です。

ここまでに三つほど、肥大化したつみきを処分しました。いや、別に公開しただけですけどね。

物語を書き直して、違う筋へ進むという事はどういうことなんでしょう。彼らの歴史は、書き替えられるほどに薄っぺらなものなのでしょうか？

私は、これを「編曲」だと思っています。物語る、という行為のため、語る手段の変更と改良。

## 八段目：談話

必要な舞台装置は照明だけ。場所はプールだが、そのセットは特に必要ない。照明は、鮮やかな青と、それに劣らない赤の光線。そして、できる限り出力のあげられる白色灯。観客の視界を奪えるほどの眩しさを出せば良い。

舞台は固い床。

役者：ツミ（男、着物）、サキ（女、男でも良い。中性的な人物希望）、天使・モノ（女、三者より幼い）、楓・千重（女、赤い長髪のかつらがあると良い）

（開幕）

舞台は青い光線で照らされている。

ツミ、サキ、モノ、舞台の中央で三者は向かい合って立っている。舞台下手（左側）より、カン、と千重の足音。袖より姿を見せる彼女だけに赤いスポットライト。（舞台の照明と混ざって紫にならないように注意）

千「私はこの世界の継続を肯定するわ」

ツミ、サキ、モノは彼女の方を見る。

千重、舞台の三分の二まで移動。ツミは不動のまま千重を迎えるが、サキとモノは舞台の右側に逃げる。

ツミ、静かに彼女の前に歩み出る。

ツ「どうして？ どうして君はこの世界の歪みを許せるの？」

千「歪んでいる、歪んでいないが問題じゃないわ。この世界はこれまで永く続いてきた。歴史というつみきは、私達が測ることができないくらい高く積まれたわ。それを、いま壊すことを許せないだ

け」

ツ「この世界は間　！」

千重が右腕を突き出してツミの言葉を遮る。彼女の長い髪が華やかに翻る。

照明、ツミと千重の間を境に、舞台を青と赤で分ける。（天井灯を使って分けられると良い）

千重が上手（右側）に向かって歩き出す。ツミはそれに気圧されるように後ろ歩きする。

千重とツミの動きに合わせて、照明、青と赤の境界をずらしていく。

サキとモノはツミの背後に留まり続ける。必要なら動く。  
舞台が青と赤に二分された時、千重とツミの動きも止まる。

千「ごたくは沢山だわ。世界を滅ぼすというのなら、その迷いを捨ててから来なさい」

青の領域に留まっていたサキが、境界に、千重の前に歩み出る。

サ「それは、どういうことですか？」

千「（サキの方を向いて）ツミは迷いがあるからこそ、いまこの場にいるという事よ。答えを出すことができないから談話を望むのだわ」

（再びツミの方を向いて）世界が崩れるのなんて、当然のことだわ。この世界は積まれた物なのだから。壊れるのは人の罪への報いかも知れないわね。それならば、私はその崩壊から逃げようとは思わないわ。でも、その終焉は誰かの手によってもたらされる物ではないわ。私の望みはこの世界が自然に崩れるその音を聞くことよ」

千重がツミに肉薄する。ツミは動かない。  
照明も動かない。青い照明が白みを帯びる。

千「魔王　として言うわ、失せなさい。迷う手で、震える手で、何も掴むことはできない。壊すことだってできない。お前は何もできないのよ」

千重が右腕を、叩き付けるように前に突き出す。それを合図に白い照明が急速に強まる。苛烈な光が見る者の視界を奪う。

それは三秒の間。その間にツミは音を立てずに、すみやかに退場する。

三秒後、照明はほどよい明るさの通常光になる。青と赤の照明はもう無い。

この間、千重は右腕を下げない。

一呼吸おいてから千重は右腕を下げる。身体の力を抜いてから舞台の角に立っているモノに視線をやる。

千「こちらへ来なさい、　鏡花水月　」

人見する少女のように、上目使いで千重を見ながらモノは千重に近づく。

二人は正面から向き合う。

千「（優しく）ありがとう、　鏡花水月　。先を見出してくれて」

モノ、沈黙。千重は彼女の返答をそう長くは待たない。

千「　鏡花水月　、この際だから言っておくわ。あなたは無力な存在でもない、囚われているわけでもないわ。あなたの周囲には、確かに孤独が山をなして積まれているけれど、それはあなたの意思

ですぐに壊れる物だわ」

モノは声を出して答えはしない。慎ましく、千重に頷いて理解を示し、静かに退場する。

千重は次にサキを見る。視線を受けたサキは無言のうちに千重の前に歩み出る。

サ「どうして、あなたは世界の継続を肯定できるのですか？ それを口にすることができのですか？」

千「それは、私という存在がここにあるから。生きている、からだわ」

しばし間。千重は一人で軽く頷いてから口を開く。

千「これからどうするの？ 学園には来ないの？」

サ「（少し考えてから首を横に振る）私の物語はまだ終わってませんから。私は、まだこの世界の希望を見出せていませんから」

そう、と呟き千重は踵を返し下手へ去ろうとする。その背中にサキが問いかける。

サ「この世界は積みなおせると思えますか？」

千「（サキを背中越しに見ながら）ある程度はできと思うわ。

でも、さっき言ったとおり、世界はいずれ滅びるわ。時の果てには、必ず」

サ「なら、それまでならこの世界は在り続けるということですね」

千「世界に生きる者たちが、継続への意志を捨てない限り」

サ「世界に転生<sup>カン</sup>の音楽は奏でられ続ける！」

サキの言葉に微笑むでも眉を顰めるでもなく、無表情で千重は下

手から退場する。サキも、彼女が退場しきる前には踵を返し、上手から舞台を去る。

照明は二人の退場を待って消える。

終幕。

## 八段目：談話（後書き）

二十九個目です。二十八個目はどうしたかといえば、前回のお話が実は二十七個目と二十九個目の合わさったものだったのです。

今回気がついたのですが、台本風に書くと、人物の気持ちを文字にできないのです。皆様には迷惑かもしれませんが、これは私の修行の一環だったりします。

次回でだらだらやっていた『つみき談話』も終わりです。最終話は月曜日あたりになると思います。この次は二月ぐらいから『my moon』というサキとかツミとかが出る物語を書くつもりです。

## 九段目：まとめ

青い空、青いキャンバス。

白い雲、白い柄の筆。

さややとそよぐ木の枝、そこには数え切れないほどの緑の宝石がある。幹は大地にずんと根ざし、その大地には常磐色の絨毯が敷かれている。

太陽が高い空から穏やかに光を投げている。

つまんねえ景色。

寝そべった俺の視界は、仰ぎ見る空の青で塗りつぶされている。

この視界の端に、天色の短髪の頭が映っている。今日の俺の同行者、マリエノース・ビアッティの頭だ。

マリ（マリエノースのことだ）は蒼天の平原で飽きることなく写生を続けている。何時間も。いま来ている場所は、そこにいる者の望む天候で停止するという変な場所なので、いつまでも俺達は真昼の草原にいるわけだが、そうでなければとくに誰そ彼になっっているだろう。

彼女のキャンバスに描かれているのは、空と緑の海、そして一本の大樹、それだけだ。この俺を引っ張り出したんだから、もうすこしおもしろみのある絵を描けっつんだ。

いったいどうしては俺は、こんなつまらないことを引き受けたんだ？

\*

「アレッシュ様。マリの写生の付き添いをしていただけませんか」  
「俺に幼女趣味はありません」



「……あら、それでしたら、私でいかがですか？」  
「いかが、て、何がですか？」  
「ふふ、さあ……何のことでしょうね」

\*

俺としたことが、あんな手に引つかかるなんて。第一、理事長補佐に手を出したら理事長が黙ってないだろう。まあ、クーフナーの大剣士である俺様があの男に負けるわけはないんだが。

「ねえ先生。あの雲がうまく描けません」

「ああ？」

これは後で緋湖を虐めるしかねえ。

そう、腹で決定してから、俺はチビ女の絵を見るために身を起こした。

「良くできてるじゃねえか」

「だめだよ。この絵の雲は、あの雲みたいにふわふわ飛んでかないもん」

「んなの、当たり前だろ」

ちなみに、今このチビは生意気にも油絵を描いてやがる。やるだけあって絵はうまい。その緻密で写生的なこと、原っぱの草は一本ずつ、大樹の葉も一枚ずつ、雲なんて水蒸気の粒が見えそうなほど真に迫っている。

「ねえ、先生。完全なつみきつて何だろうね？」

ふいに彼女が訪ねてくる。青玉の瞳に宿るのは、<sup>サファイア</sup>真実への探究を求める光。

「完全ってなんだよ」

「完全って、描けてる物が何もない状態じゃないかな？　すべてがそこにある、満ち足りた、幸せな状態」

「すべて……？」

一体すべてとは何だ。俺にはわからない、俺は。

「何もない状態はあるよね。一切の物をかき消した、寂寞の状態」  
本当にそうなのか？

俺はマリの小さなパレットナイフを手を取った。

「油彩のキャンバスは、絵の具を削れば消せる。でも、完全に白くなるわけじゃねえだろ。絵の具を塗られた、名残がある」

「絵はキャンバスごと捨てればいいです」

あ、そうか。

でも、と彼女は呟く。

「完全な無はある。けど、完全な「有」ていうのはないんだね」  
心哀しそうに言うマリ。だが、それは悲しむことなのか？

「俺達は完全をしらねえ。それだけだろ？」

あたたかい、夏色の風が吹いて、一面の緑の海原に波をつくった。  
「完全<sup>すべて</sup>なんて、俺にはわからない、そして、俺は考えたくもない。  
俺は完全になんてなれねえだろうし。」

「でもよ、それを目指すのはそいつの勝手だろ。進むのはそいつの勝手、止まるのは俺の勝手。ただ、進めねえって諦めて、世界すべてを毀そうとするのは間違いだろ」

……少し饒舌になってしまった。俺はべらべら喋るのは嫌いだ。  
俺が黙り込んだのを見て、マリは再び絵筆を動かしはじめた。あの筆の動きが止まるのはいつのことだろう。そう思いながら、俺ももう一度草はらに仰向けになって青空を眺めることにした。

不透明な空の青も完全ではない。

俺達と完全との間にある隔たりは、この青空までの隔たりと同じぐらいだと思う。手を伸ばせば届きそうで届かない距離。

頭上の天のことを思った次に、身体の下にある大地のことを思った。

大地とは、世界がはじまってからここまでの永い時間の間、生まれたり死んだりした連中の思いとか屍の積み重ねなんだろう。その思

いとは、果てない何かを目指し続けた奴の物から、一章目先の小銭だけ追い続けた奴の物まで、いろいろだろう。

俺には無縁の者達。

俺は、俺の生き方をして、そして死ぬ。頑張る時もあるし、諦める時もある。

目を閉じる。穏やかな風と時の流れがこの身と心を包んでいるのを感じた。世界が生きている、まだ生きている、いまは生きている、この瞬間を全身で感じた。

俺は完全など知らない。だが、こうして穏やかな世界の中で寝ころんでいるこの時は至福そのものだ。

## 九段目：まとめ（後書き）

最後になった三十個目のつみきです。

「つみき談話」の最終話は一つ目のつみきにしようかと思ったのですが、きれいにまとめたくなかったので三十個目のつみきと相成りました。「完全」というテーマを引き継いで、アレッシュが彼なりの答えを出してくれるのが違います。

最終話に当たって、戦闘シーンを出さないようにつとめました。個人的に戦闘を書くのは好きなんですけど、あんまり書くと長くなるし、全体には短いですし、あくまでも私が書きたいのは「呟き」であり戦闘ではなかったのです。

いかがだったでしょう。通して読んでくれた方、いますでしょうか。自慢じゃありませんが、読者数はかなり少ないらしいです。ものによつては一桁……。

ですので、すべてを読んでしまった人、何でも良いですから感想を下さい。評価は結構ですから、罵倒でもなんでも、一言お願いします。

では、またお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2831d/>

---

つみき談話

2010年10月10日12時11分発行